

第1章 インターナショナル・アラートの紛争転換アプローチ

- はじめに
- 紛争転換と持続可能な平和
- 和平プロセスへの民衆の参加
- トレーニングに紛争転換能力育成アプローチを使う
- 本書について
- フィードバックと今後の展望
- 参考文献および謝辞

紛争転換リソースパック
インターナショナル・アラート

第1版 1996年11月
イアン・ドウシェ編

1.はじめに

この度、『インターナショナル・アラート紛争転換リソースパック』第1版を出版するあたり、草稿段階で寄せられたフィードバックに対してインターナショナル・アラートは感謝の意を表したい。さらに、本書の執筆担当者および出版助成を提供した欧州委員会に対して謝辞を述べたい。

読者にとって、本書が、紛争解決に関するワークショップを企画したり実際に参加したりする際に有益な情報の宝庫となれば幸いである。紛争研究および紛争解決の分野には、大量の先行研究の蓄積があり、多彩な手法、理論、あるいは視点が提唱されている。本書は、その多様な領域の中から、そのごく一部を紹介したに過ぎない。

本書の位置付けを明確にするために、インターナショナル・アラートが採用している紛争解決のアプローチに関して以下に概略を説明する。本章の内容と章立てについて、本章の中で後述する。

年々増加の一途を辿る暴力的な国内紛争に対応するために、インターナショナル・アラートは1985年に設立された。一国内で勃発した紛争は、その国の人々の人権を危険にさらし、その国の社会および経済の持続可能な発展を妨げる。当時、国際機関の多くは、国家間の戦争、とりわけ西側陣営と東側陣営とが対峙していた冷戦に、その関心の大部分を注いできたように思われる。しばしば泥沼化する暴力的な国内紛争は、根深い対立に起因し、多くの苦しみの源泉になっているにもかかわらず、その勃発を未然に防いだり解決をしたりする機関や方策が今までにはなかった。

過去10年間にわたりインターナショナル・アラートは、暴力的な紛争を持続可能な平和へと変えていくために、パートナーの諸機関と連携し、行動することを重視した多文化の非政府団体として発展してきた。インターナショナル・アラートの活動のキーワードは「紛争転換」と「持続可能な平和」である。

2.紛争転換と持続可能な平和

紛争解決には様々なアプローチがある。しかしながら、紛争をただ単に終結

することのみを目指したアプローチは、長期的には機能していないことが多い。力づくで鎮められた紛争はしばしば再燃化する。紛争が発生したそもそもの原因を取り除くことなく締結された和平、あるいは紛争当事者がたとえ一方でも不当に扱われたと感じている和平は決して長続きはしない。

ここで使われている**紛争転換**とは、すべての紛争当事者の不平に耳を傾け、彼らの要求するものや対立する主張を認知することを目的とする特別なアプローチのことを指す。このアプローチでは、停戦や紛争の終結を早期に実現する方策のみに注目するのではなく、むしろ紛争が暴力化していく過程を重視する。紛争が起っている社会に蔓延する不平等や不公平さといった構造的問題に目を向け、武力闘争に代わる現実的な代替案を提供する。このアプローチは、暴力化し破壊的になってしまった紛争を、紛争や暴力の温床となった諸要因を次々と取り除くこと、あるいは少なくとも削減することによって社会変革を促すような建設的な力へと変えていくことを目標としている。このような努力の結果もたらされる平和とは、しっかりとした基盤の上に立ち、永く続くのである。

平和を持続可能なものにすることは、紛争を引き起こした構造的要因を変えることができるか否か、そしてそのような変革を暴力以外の手段によって達成する方法を見つけることができるか否か、にかかっている。平和が長く続くためには、紛争を平和裡に解決する効果的な手段が、例えば強固な市民組織の存在、法の支配と中立な警察や司法制度の確立、あるいは民意を反映する政府の存在や国政への人々の効果的な参加の実現といった形で、社会構造の中に根付いていなくてはならない。

本書では通して「暴力的紛争」という言葉が、戦争や武力紛争といったすべての暴力的な紛争を総称する用語として用いられる。紛争に関与しているグループは通常「紛争当事者」と表現し、その他の紛争転換に従事する個人や集団は「第三者」と総じて呼ぶことにする。

3. 和平プロセスへの民衆の参加

インターナショナル・アラートのアプローチに特有な今一つの特徴は、平和を築き上げる過程において、紛争地域に根ざしたコミュニティと「第三者」

が重要な役割を果たすと強く信じている点だ。民衆が中心となった集団は、紛争が戦闘によってではなく話し合いによって解決されるように圧力を加えるのに最適である。また、敵対する紛争当事者間に意思疎通を絶やさないように迫ることに、そして民衆や市民社会のニーズを優先させるように要求することにも、民衆グループは適していよう。一方、第三者は正確な情報に基づき正当な動機に基づいた仲裁（mediation）や仲介交渉（facilitated negotiation）を提供することができる。とりわけ、紛争地域に根ざしたコミュニティーは、紛争当事者たちがどのような内容であれば合意することができるか、あるいは平和を長続きさせるためには何が必要か、といった問題に対して現実的な助言するには適任である。さらに、紛争地域に根ざしたコミュニティーは、和平合意の履行を監視する際にも力を発揮するであろう。

紛争地域の団体や地域的あるいは国際的な機関と協力することによって、インターナショナル・アラートは暴力的な紛争の予防と解決に向けて世界各地で積極的に活動してきた。例えば、アフリカ南部諸国、ブルンジ、コロンビア、エチオピア、フィジー、ケニア、レバノン、リベリア、フィリピン、ルワンダ、シエラリオネ、旧ソ連（特にコーカサス地方）、スリランカ、スーダン、チベット、ウガンダなどの地域でインターナショナル・アラートは活動してきた。民衆が自らの手で紛争を転換していくために必要な能力を育成するために、インターナショナル・アラートはこれらの国々の多くにおいてワークショップを実施してきた。本書はこれらの経験に基づいて書かれている。

4. トレーニングに紛争転換能力育成アプローチを使う

後ほど詳しく説明するが、多くの人々は紛争転換に役立つ能力を持っている。したがって、他の組織と同様にインターナショナル・アラートでは、「紛争転換能力育成」という手法をトレーニングに用いている。暴力的な紛争をポジティブで建設的なものへと変革していく能力や手腕を、個別にあるいは複数をまとめて育成するアプローチを総じて「紛争転換能力育成」とここでは呼んでいる。紛争転換能力の集合体としては、紛争を武力に頼らずに処理していくような社会を実現するために必要な機関（地方政府や司法制度など）の擁立も「紛争転

換能力育成」に含まれる。

紛争転換能力育成ワークショップは、ともに考え、意見を交換し、そして学習するために、しばしばまったく異なった背景の人々を呼び集めて開催される。学習というものは、既知の知識を単に伝達するだけの教師やトレーナーによって可能になるものではなく、むしろワークショップの体験から生まれ、ワークショップにおいて推賞される相互交流を通じて深められていくものである。ワークショップを企画し実行する人々が、この学習過程を促進させるのである。

「紛争転換能力育成」は、紛争に関して理解を深め、紛争を平和的かつ建設的に変革していく技法を養成することに力点を置いている。技能と理解とは「紛争転換能力育成」の主要な2つのキーワードである。

ワークショップの参加者たちは、平和と紛争の過程について、様々な方法で理解を深めることになる。理論的に、あるいは実践的に、時にはいくつかの特定の事例を分析することによって経験的に。多くの人々にとってこのような複合的なアプローチは、目新しくて興奮を呼ぶものであろう。法的、政治的、倫理的あるいは軍事的な概念を理解しようと努めるのではなく、むしろ参加者たちは皆一緒に人間関係やコミュニケーションに根ざした紛争と平和に関する言い回しを学ぶのである。暴力的で破壊的な紛争を転換するために、民衆参加型和平プロセス・アプローチが市民社会の価値観や優先事項を用いるのと同様に、紛争転換能力育成アプローチもまた、ワークショップ参加者の「平凡な」体験や常識を歓迎し、それらを発展させていく。

インターナショナル・アラートは紛争転換能力育成ワークショップにおいて女性の意見が適切に反映されるよう特に配慮している。女性は、特殊で重要な貢献をすることができるが、紛争や紛争の建設的な解決に関する議論において女性の意見は十分に聞き入れられていなかった。時よりインターナショナル・アラートは女性だけで構成されるワークショップ開催の手助けしている。紛争とジェンダーとの複雑な関係については、さらなる研究が必要である。

紛争や暴力といったものの理解や経験あるいはそれらの処理の方法といったものは、文化によって重要な違いがある。多文化組織としての性格を保有するインターナショナル・アラートは、これらの文化的な違いを認識し、異文化アプローチの開発に向けて能力育成および紛争転換の両部門で日々努力を重ねて

いる。こういった努力は未だに完結しておらず、したがって依然として継続中であるが、今後はワークショップの参加者たちが不足部分を補っていくことが期待される。

このような意味において、紛争転換の本当の「リソース」となるものは、本書に記された言葉や図表ではなく、ワークショップに実際に参加する人々である。

5. 本書について

この「インターナショナル・アラート紛争転換リソースパック」は、紛争地域の人々、仲介者や紛争転換のトレーナー、個人、集団、地域コミュニティーなどで紛争解決に第三者として関与している、あるいはこれから活動しようと志す人々など幅広い読者層を対象に書かれている。

本書は、紛争を解決する「正しい」方法を処方する、いわゆる「ハウ・ツー」もののトレーニング・マニュアルではないし、長々と続く説明を読まなくては理解できないような物語集でもない。むしろ、教材集（リソースパック）である本書は、初心者にとっては紛争解決分野の入門書となるように、同時に既にこの分野で活動をしている者にとっては先達の功績から新たな知識を得ることができるように配慮されている。紛争解決のトレーナーには、自らが既に持ち合わせている資料や好みの手法にとって有益であると思われる部分を、本書の中から適宜選択して使用することを勧めたい。本書には欧米や英国的な先入観が含まれているので、読者はそのことに注意を払うと同時に、本書で紹介されている手法をそれぞれの環境に適応させる努力を怠ってはならない。

本書では論旨を明快で明確なものにするために重要な概念の定義を提示している。その目的は、「紛争解決」という発展途上にある専門領域ゆえによく見受けられる概念の不一致や重複から生じる混乱を避けることによって、読者の理解を助けることにある。

本書は以下のように構成されている。

第1章 インターナショナル・アラートの紛争転換アプローチ

本章の目的は2つに大別できる。まず、インターナショナル・アラートが用いている紛争解決の手法について概略を説明することを通じて、読者に本書の背景を説明する。次に、本書の構成や内容を紹介することにより、本書の全体像を予め提示する。

第2章 紛争についての考察

本章では既存の紛争分析や解決の理論体系の一部が概略として紹介されている。紛争転換能力育成ワークショップの参加者がワークショップの事前事後に予習や復習する際に便利のように、重要事項が簡潔に要約されている。よってトレーナーや仲介者は、本章をワークショップの参加者たちに参考資料として事前に配付したり、「紛争解決に関して何か読むものを教えて欲しい」といったような要望があった場合には、本章を勧めたりしてもよいであろう。具体的には、暴力的紛争の発生状況、種類、原因や発展段階に関する考察がある。さらに紛争解決の方法、種類およびレベルについても検証する。一方、文化的相違に関連する問題や和解・復興の問題について言及する。章末には参考文献と推薦図書の一覧が提示されている。

第3章 紛争転換能力育成ワークショップ 理論編

本章は、第2章にて概略を説明した紛争解決の概念的な「内容」について、図表やリストなどを交えながら詳細に説明を加えている。本章の目的は、バリエーションに富んだワークショップが創造されるために必要な素材を提供することにある。ワークショップを実施する際には、本章でカバーされている事項を1回のワークショップ内に詰め込むのではなく、むしろ本章の特定部分を選択して利用するのがよいであろう。ところで本章では、事例研究や具体例がほとんど紹介されていないが、その理由は、参加者たちが自ら希望する紛争や紛争解決の事例を織り交ぜていくことが、本章を自らの経験と照らし合わせて再構築していく一つの方法であると期待されているからである。

第4章 紛争転換能力育成ワークショップの手順と立案

本章では、紛争解決の具体的一手段としてのワークショップの企画・運営の

実際に関する詳細な情報を提供する。例えば、紛争転換能力育成ワークショップに関連する多くの注意事項やチェックリストを用意したり、さまざまなテクニックを説明したり、ワークショップで用いる演習が紹介されていたり、ワークショップのテーマとして適した多彩な議題が例示されていたりする。ワークショップのプロセスと立案といった紛争解決の実践的側面を取り扱った本章は、理論的側面に焦点をあてた第3章とセットで用いられることを念頭に書かれている。つまり、第3章で言及した紛争解決の概念を、具体的に応用していく術をワークショップの文脈で説明することが、本章の役割である。

第5章 注釈付き参考文献

現在発展途上中である紛争分析や紛争解決の分野について、さらに研究を勧めていくことを希望する読者のために、有益な参考文献を紹介する。ここでは、インターナショナル・アラートの出版物や報告書だけでなく、他の機関や個人によって出版されたトレーニング・マニュアル、および重要な一般書籍や学術雑誌の論文なども紹介されている。すべての文献情報の後には、それぞれの書物の要点を簡潔に言い表す注釈が施されている。

6. フィードバックと今後の展望

1996年初頭に配付された草稿に対するコメントを反映するようにリソースパック第1版は編集されたが、インターナショナル・アラートはこの時得られたフィードバックに対して謝意を表すとともに、第1版に対する新たなフィードバックを歓迎したい。

例えばジェンダー問題のように紛争および紛争解決分野のある特定の領域は、第2章末の参考文献を提示するのみで、現行のリソースパックの5つの章では十分に検討されていない。インターナショナル・アラートでは、諸種の事情を考慮に入ながら、加筆する可能性を現在検討している。現在加筆が検討されているトピックには以下のようなものが挙げられている。

- ジェンダーと紛争転換

- 和平協定
- 紛争解決の事例研究

7.参考文献および謝辞

本書は、インターナショナル・アラートの職員、仲介者、協賛団体や個人、ワークショップの参加者などの多様な情報源から情報提供により成り立っているが、彼らに対して謝意を示したい。各々の章で参照した情報源については各章末に記してある。しかしながら、特定の意見や図の中には、多数の実務家や著者による議論を通じて発展してきたものもあり、時として、それらの原典を明確にすることが難しいこともある。なお、本書の表紙に使用されている家の中に人々がいるモチーフ（図柄）は、1995年12月にセネガルのダカールで開催されたワークショップの参加者がデザインしたものである。